

平成 21 年 4 月 30 日現在

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2006～2009

課題番号：18500476

研究課題名(和文) 動きの変容がもたらす身体の認識力と自己教育力の変容

研究課題名(英文)

Change in both cognition of body and self-education brought by change of movement

研究代表者

筒井 清次郎 (Tsutsui Seijiro)

愛知教育大学・教育学部・教授

研究者番号 00175465

研究分野：体育心理学

科研費の分科・細目：健康スポーツ科学・スポーツ科学

キーワード：身体の認識力、自己教育力、動きの変容、運動有能感、両手協応課題

1. 研究計画の概要

運動技能の習得を通して、自己の身体や動きの構造に関する認識や、自ら学ぶ意欲や、運動に対する有能感、自己決定感などがどのように変容していくのかを明らかにしていく。

2. 研究の進捗状況

本研究の目的は、学習者が習熟していく過程で、なかなか学習が進まない時、ようやく困難な課題を習得できた時、次の課題で再び学習が進まない時、それぞれの時期における運動有能感の変遷を明らかにすることである。運動技能の習得を通して、自己の身体や動きの構造に関する認識や、自ら学ぶ意欲や、運動に対する有能感、自己決定感などがどのように変容していくのかを明らかにしていく。

すべての学習者にとって、初めて課題に向き合った時には習得できず、かつ、時間をかけることによってすべての学習者が習得でき、なおかつ、その学習過程が、質的にも、量的にも数値化できる課題の設定が最も重要である。本研究では、両手協応課題の1/4周期の位相のズレを課題とした。この課題では、前述した前提が可能であることが、先行研究(Tsutsui et al, 1998)において確認されている。

対象者は、体育専攻の大学生及び大学院生

とした。彼らは、一般の学生に比べて、運動有能感が既に高いことが予想される。

結果は以下の通りである。

(1)学習が進まない時 基本的に高い運動有能感を有している彼らにおいても、学習が進まない経験を継続することによって、運動有能感の低下が見られた。

(2)困難な課題が習得できた時 当然のように、運動有能感の向上が見られた。

(3)次の課題において再び学習が進まない時 運動有能感の低下が予想されたが、最初の時ほどの低下が見られなかった。

考察

一度、失敗の連続後に成功することによって、運動有能感を高めることができると、2度目の失敗の連続によっても、運動有能感の低下は大きくなかった。このことは、体育場面等で児童・生徒が有能感を高めることができれば、以後の体育場面に限らず、他の生活場面において失敗を経験しても、有能感を維持し前向きに課題が取り組めることを意味している。ここに、体育という教科が果たすべき一つの重要な側面が示されたと考えられる。

3. 現在までの達成度

やや遅れている

予定では昨年度で実験は終了し、今年度はまとめる予定であった。しかし、実験ソフト

にエラーが出現し、その改良に時間を取られたために、運動の得意な者ができない運動を習得していくプロセスについては終了したが、運動が苦手な者が運動を習得していくプロセスに関しては今年度行う。

4. 今後の研究の推進方策

多少遅れているものの前期中に実験を終了し、後期には予定通り全体をまとめられる。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

筒井清次郎 運動技能の習熟プロセスについてのナラティブ研究、東海保健体育科学、査読有、29,2007,55-63

〔学会発表〕(計1件)

筒井清次郎 運動制御と学習研究を現場に還元するには、35回日本スポーツ心理学会ラウンドテーブルディスカッション企画・司会、2008年11月15日、中京大学

〔図書〕(計3件)

筒井清次郎他 大修館書店、スポーツ心理学事典、2008,82-85,163-166,204-207

筒井清次郎他 平凡社、スポーツ科学事典、2006,750-751

筒井清次郎他 杏林書院、運動行動の学習と制御、6章運動行動の理論、2006,109-121

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

取得状況(計 件)

〔その他〕